

1 主題名 4-(9)日本人としての自覚

2 資料名 修学旅行
ねらい

主人公が知恩院三門や石畳の小路で感動した一つ一つを掘り下げ、歴史的建造物を作り上げた人々、文化遺産として大切に保存し、後世に伝えてきた人々への共感を通して、日本の文化に誇りをもち、大切にすることを養う。

3 主題設定の理由

自分を愛せないものは家族、友人を愛せない。ひいては地域や自己を愛することができるはずがない。本主題「日本人としての自覚をもって国を愛する」は自己愛を中心に、家族愛・地域愛が重なって形成され、世界に目を向けたときによりどころとして立つ精神的な足場として自覚するものである。そして、

- 1 先人達が営々と築いてきた文化伝統、歴史
 - 2 美しく豊かな自然に恵まれた国土
 - 3 繊細微妙で豊かな表現力をもつ日本語などを意識する
- ところに日本人としての自覚が発現するのである。

本資料は、前述した1への視点から主題に迫る。京都の魅力を一口に言えば、千年の歴史に育まれた日本的な風情と文化・伝統の格調の高さにある。有形無形にかかわらず、その一つ一つが世界の宝であり、日本の誇りである。多くの歴史的建造物や美術作品は、国策として、あるいは権力者の権勢を示すものとして作られたにせよ、それを成し遂げたのは多くの職人達であった。そして、寺院建築に見られる様式美や仏教彫刻の美は庶民の心をとらえ続けた。さらに、京都の歴史的町並みを作ってきた背景には、自然と調和しながら生活を営むという人々の心が息づいている。これらに目を向けるとき、日本人の心の故郷として、京都が自分とつながるのである。資料は、主人公をして感動せしめるものは、誰もがもっているであろう日本人の感性に他ならないことに気づかせ、主題に迫ろうとするのである。

・ 指導内容の系統

教科における指導 社会科 「飛鳥文化」 (1学年) 音楽 「歌舞伎と文楽」 (2学年) 美術 「金色の効果を生かした表現を味わおう」 (12月)	—	道徳 4-(9) 「修学旅行」 日本の優れた伝統に対する理解を深めるとともに優れた文化、伝統を守っていかうとする態度を養う。 (本時) 「薪能」 能が世界に誇る総合芸術であることを知り、日本の文化伝統に誇りを持ち、大切にすることを養う。 (2月)	—	体験活動や実践活動 鎌倉への修学旅行 (小学校) 京都・奈良への修学旅行 (中学校)
---	---	---	---	--

3 生徒の実態について(33名)

(1) 学級の実態

素直で、屈託がない。しかし、自分に対して自信が持てない生徒が多い。道徳の時間は、自分の意見を皆に話し、さまざまなものの見方があることを知る時間と位置づけているので意見を言うことに抵抗はない。

4-(9)は1学年の「和太鼓の響き」の中で苦しみを乗り越えて演奏を終えた主人公の心情を考えることで、2学年では「千年の道程」において主人公の、日本語を大事にしなければならないとする理由を考えることで、ねらいに迫ってきた。3学年では、他教科との関連を踏まえ、また、自身の進路や生き方を考えつつ、日本人としての自覚に目覚めさせたいと考えている。

(2) 主題に関わる実態

・ 調査結果

日本の文化に関する印象についてのアンケート調査

調査人数：32名 調査実施日：4月22日

- 日本的だ、と思う事柄
 - ・剣道などの武道
 - ・国語科の授業 3名
 - ・色の名
 - ・優先席
 - ・譲り合いの行為
 - ・「もったいない」の思想
 - ・浴衣などの和装 3人
 - ・味噌汁
 - ・寿司などの和食 9名
 - ・箏
 - ・靴を脱ぐ・畳
 - ・人目を気にする傾向
 - ・神社への参拝
 - ・目上をたてる行為
 - ・謙虚なところ 3名
 - ・祭
 - ・障子
- 日本の伝統文化とは（過去の経験）（調査①）
 - ・鎌倉鶴岡八幡宮
 - ・大原はだか祭
 - ・城
 - ・日舞
 - ・将棋
 - ・鎌倉の大仏 26名
 - ・能
 - ・日光東照宮
- 修学旅行で期待すること（複数回答可）
 - ・八橋などの京都ならではの食べ物 12名（調査③）
 - ・歴史 6名
 - ・建造物（書院造、金閣寺、銀閣寺など）（建物のにおい1名を含む）13名（調査②）
 - ・伝統工芸品
 - ・有名な庭園（竜安寺）
 - ・俳句

西岡常一の仕事に関するDVDを視聴して（『木に学べ』小学館DVD）

- 印象に残っている言葉
 - ・木を買わずに山を買え 10名
 - ・コンクリートで造るのは感心せん 11名
 - ・釘は使わず木を組んで建てる 11名
 - ・魂をこめて削る
 - ・永遠という時を建物は生きていくが、宮大工の命は短い
 - ・木の個性を生かす 3名
 - ・木のために道具を考える

アンケート調査をする前には生徒にとっての「日本」的な印象とは、小学生の頃の鎌倉の大仏を参拝した経験や、国語科で読んだ『附子』という狂言の一節が書かれるだろうと考えていたが、調査してみると、確かに大仏の印象は色濃くあるが、その他、これまで見たり、訪れたりして実際に目の当たりにした経験が書かれていた（調査①より）。

従って、授業を行うにあたっては、資料を用いて主人公の心の変化を深く考えさせるために、日本の文化を考えるヒントとしてDVDの視聴を行いたい。実際に生徒たちが法隆寺をはじめとする歴史的な建造物を目にする前に、それを再建しようとした棟梁たちの並大抵でない苦勞を知ることは、彼らにとって有効だと考えたからである。当初、『木に学べ』や『東大寺の五重の塔』などの書物による資料の活用も考えたが、アンケート結果を見ると、これまでの実地の経験が多く記されており、書物よりも視聴覚資料の方が彼らにとってより考える一助となりやすいと判断した。また、五感に訴える回答（調査②より）をしている生徒が1名ではあるが学級にいたので、檜の香りをかがせた上で、檜の効能を伝え、気候や風土に合った木材を選んだ先人の優れた知恵に気づかせたい。

また、修学旅行から帰ってきてからは、本時の内容を踏まえ、修学旅行新聞の中で日本の伝統をどう感じ取ってきたかをまとめさせる。また、併せて今後の道徳の計画の中で「江戸しぐさ」の教材を開拓して、建造物だけでなく、脈々と流れる日本人の心にも触れさせたいと考えている。

道徳の時間、生徒は自分の意見を発言することが保障されているとわかっているものの、本時の「日本人としての自覚」というねらいに対しては、ややものの見方、考え方が幼い生徒も多く見られる（調査③による）。そこで、ペアでいったん自分の考えを出し合い、相手のものの見方、考え方を参考にさせてから全体に発表することにする。それにより、「日本」という彼らのバックボーンを意識した発言が増えるものと期待するからである。授業の展開としては、全体に投げられたペアの意見を咀嚼した上で、再び個に返し、修学旅行を前にして実践的な意識を持たせるところまで狙い、本時の評価に代えたいと考える。

授業の中で、声の小さい生徒や、教室に入れず、別室で自習をしている生徒などがいることを配慮して、聞き取りにくい声でも周囲が配慮したり、一緒に本時の学習ができない級友にどんな助言や説明を班別学習時にするかを想定させたりして、福祉的な面の実践も意識させたい。

